

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「買い物や温泉、指紋でOK 外国人観光客向け、10月に実証実験」
- 2) 「トヨタ、コメダ珈琲店、KDDI、“ながらスマホ運転”事故防止プロジェクト」
- 3) 「Uberが食事をお届け“UberEATS”が日本上陸！まずは東京から」
- 4) 「意味もなく“グルテンフリー食” 5年で3倍、全米健康栄養調査」

---

1) 「買い物や温泉、指紋でOK 外国人観光客向け、10月に実証実験」

経済産業省は28日、外国人観光客が指紋などの生体認証で本人確認を行い、現金を使わずに買い物や温泉などが利用できるシステム「おもてなしプラットフォーム」の実証実験を、10月から関東、関西、九州の3地域で開始すると発表した。2020年東京五輪を見据え、あらゆる機器がインターネットにつながる「モノのインターネット（IoT）」を活用し、訪日客の利便性向上につなげる。

訪日客が来日時に、指紋や手のひらなどの生体情報とパスポートやクレジットカードなどの情報を登録すれば、宿泊手続きや買い物時の支払いがスムーズになる仕組みを、地域ごとに導入する。

関東では、神奈川県箱根町や湯河原町などの観光地で、指紋認証による決済を導入する。温泉施設や飲食店、旅館・ホテルのチェックインなど約100店舗で利用できる。関西ではスマートフォンによる手のひら認証を使い、手をかざすだけで大阪市の水族館「海遊館」や隣接するショッピングモールなどで支払いができるようになる。九州では福岡市で行きたい場所や好みの情報を受け取ることができるサービスを行う。

同プラットフォームは、訪日客の氏名や住所などを共有化して管理するほか、消費動向などの分析も行う。ただ生体情報や信用情報などの取り扱いについては、個人情報保護上の課題があるため、経産省は実証実験を通じたルール整備を進める方針だ。

この他にも2020年の東京五輪に向けて無人のコンビニや自動運転の技術を活用した飲食店の待合システムなどテクノロジーを駆使したサービスの導入が始まろうとしている。「おもてなし」というのは画一的な対応ではなく人の心が生み出すものと認識していたので、これが日本のおもてなしのスタイルになろうとしていることに少し違和感を感じてしまう。様々な国の人に快適に過ごしてもらうためには必要なことなのかもしれないが、同時通訳ができるツールの開発などの方がコミュニケーションが取れて本来のおもてなしに近づくのではないかと思う。とは言え、あと4年でどれだけ日本が変わっていくのか興味深い。

---

2) 「トヨタ、コメダ珈琲店、KDDI、“ながらスマホ運転”事故防止プロジェクト」

トヨタ自動車、コメダ（コメダ珈琲店）、KDDIの3社は9月20日、2016年秋の交通安全週間（9月21日～9月30日）に合わせて、「ながらスマホ運転」事故防止プロジェクトを開始すると発表した。同日よりスマートフォンアプリ「Driving BARISTA」の提供を開始し

て、愛知県における「ながらスマホ運転」による事故の低減を目指した取り組みを開始する。

現在、愛知県では2015年の人身事故件数が4万4369件発生しており、交通事故の低減が課題となっているとともに、自動車運転中の携帯電話使用等違反の検挙数についても県内で5万101件発生しており、「ながらスマホ運転」の増加も問題となっている。

今回提供される「Driving BARISTA」は、運転中にスマホ画面を伏せた状態の走行距離を計測して、走行した距離が100km分（2回目以降は200km毎）蓄積されると、愛知県内の「コメダ珈琲店」でブレンドコーヒーまたはアイスコーヒーと交換できるクーポンを手に入れるというもの。

走行距離の計測対象は愛知県周辺となり、走行距離蓄積期間は9月20日-10月6日、コーヒー引換期間は9月20日-10月31日となっている。

アプリ開発を担当する、KDDI CSR・環境担当役員の土橋明氏は「“ながらスマホ”防止の啓発活動は継続して実施してきたが、3社で取り組むことで愛知県の課題解決につなげていきたい。今回のDriving BARISTAは、スマホを単純に禁止するのではなく、発想を変えて、新しい体験価値提供を通じて事故防止に貢献していきたいという思いで開発した」とコメントしている。

自動車メーカー、通信、飲食が連携してアプリを活用した交通安全の取り組みを実施するのは日本国内初の試みといい、誰でも参加しやすい形の運転事故低減につながる啓発活動に取り組むことで、愛知県内の交通安全を推進していくとしている。

全く業態の異なる3社が連携している点が面白いと感じた。100kmはでコーヒー1杯というのは中々大変な気もするが、運転中は携帯を見ないことが当たり前になっている人にとってみると何もしなくてもコメダのコーヒーが飲めるという点では嬉しいサービスだ。ポケモンなどで「歩きスマホ」に目が向けられる中、大事故に繋がる車での「ながら運転」にも改めて注意喚起するいいきっかけになって欲しい。

---

### 3) 「Uberが食事をお届け“UberEATS”が日本上陸！まずは東京から」

配車サービス「Uber」のフードデリバリーサービス「UberEATS（ウーバーイーツ）」が、都内を皮切りに、9月29日より日本でも実施される。

アプリ「UberEATS」（iOS/Android対応）から、配達先住所を指定し、レストランと料理を選んで注文するという流れ。アプリに登録したクレジットカードで支払う。配達は、登録されたパートナー配達員が、自転車か125cc以下のバイクにて行う。

参加店は、焼肉トラジ、イタリアン「ダルマツ」、精進料理「宗胡」、ドーナツチェーン「クリスピー・クリーム・ドーナツ」など150以上がラインナップされている。

まずは、渋谷・恵比寿、青山・赤坂、六本木・麻布エリアからスタートする。今後、順次エリアを拡大していくとのこと。初回注文は9月29日11時から。

なお、サービス開始から1か月間は、“ワンコインキャンペーン”が実施される。さまざまなレストランより1品ずつ、500円（税別）で注文できるそう。また最初の注文が最大2,000円引きとなるほか、ほかのユーザーに紹介すると次回の注文1,500円分が無料になる。

UberEATSは、すでに7カ国33都市で提供されている。これらの都市でも利用できるため、海外旅行中などでも、現地周辺の料理を楽しめるのだとか。

その店舗のスタッフではなく登録されたパートナー、つまり素人が配達するということに少し驚きを感じた。安全面での不安が残るが、このシステムが徹底できれば飲食店だけでなくスーパーなどの配食サービスにも応用できそうだ。人員やコストの削減にも繋がり、今後を期待できるサービスだと感じた。

---

#### 4) 「意味もなく“グルテンフリー食” 5年で3倍、全米健康栄養調査」

「グルテンフリー食」を必要としないのに実践する人は年々増加している。流行の食事療法の実態を調査した統計研究結果が、米ラトガース大学医学大学院の研究者らによって発表された。

「グルテンフリー食」とは、小麦や大麦などに含まれるたんぱく質「グルテン」への過剰反応によって体調不良を起こす「セリアック病」患者のために開発された、グルテンを除去した食事のこと。セリアック病の患者は白人種に多く、欧米ではスーパーマーケットやレストランでもグルテンフリー食が提供されているが、日本では患者はほとんどいないか、存在しないとする報告がある。

主食はもちろん、大半の食品にはグルテンが含まれているため、セリアック病患者の多くが偏った食事を強いられ、栄養失調や低体重に陥ることもある。患者にグルテンフリーは欠かせないが、海外の著名人などが健康食として実施しているとされ、欧米では患者以外の人にも流行している。

ただし、これまでのところ、健康な人がグルテンフリー食を実施することで何らかの効果が得られるかを示すエビデンス（科学的証拠）は存在しない。

研究チームは2009-2014年の全米健康栄養調査（NHANES）に回答した6歳以上の参加者2万2278人に聞き取り調査を実施し、「グルテンフリー食を実施したか」「セリアック病と診断されたか」を確認した。

その結果、セリアック病患者は参加者の106人（0.69%）だったのに対し、患者ではないのにグルテンフリー食を実施している人は213人だった。

年度別に見ると、非患者のグルテンフリー実施率は2009-2010年に0.52%、2011-2012年に0.99%、2013-2014年に1.69%と年々増加し続けているが、患者数はすべての年度で0.6-0.7%台の横ばい状態だという。

非患者に「なぜグルテンフリーを実施しているのか」を確認したところ、「健康的に思える」「（自己診断に基づき）自分はセリアック病だと思う」という回答が最も多かった。研究者らは「グルテンフリー食の拡大（グルテン摂取機会の減少）が、患者数の増加を抑制している可能性も否定はできないが、基本的に患者以外には意味のない食事であり、バランスの良い食事が基本となる」とコメントしている。

発表は2016年9月6日、米国医師会の内科分野専門誌「JAMA Internal Medicine」オンライン版に掲載された。

日本でも食のトレンドは絶えず話題にのぼるが、ネット上で情報が氾濫し何が正しいのか判断できないことが多々ある。グルテンフリー食のように元は治療食として開発されたものが日本では健康食、ダイエット食として広まるのはなぜなのか、疑問に感じた。本当に健康といえる食事がどういったものなのか、自己判断が難しくなりつつある。